

## 村研大会に参加して

農村生活総合研究センター

荒 桶 豊

第三回村落社会研究会大会が一月二〇、二一の両日にわたりて島根県玉造温泉に於いて開催された。

この大会では五本の自由報告と三本の課題報告、そして特別報告がなされた。昨年から引き続いだ「土地と村落」を共通課題としているが、今年は特に「村落の変貌と土地利用秩序」に焦点があつた。自由報告の中にも共通課題に直接結びつくものがいくつかみられ、「土地と村落」が村研にとって極めて根本的なテーマであることを知られたのであった。

まず、自由報告について簡単にみてみる。佐藤直由・内田司会員

は牡鹿半島の漁村を対象にして、漁民層分解の実態を各漁家の内的要因（ライフサイクルと経営内容の変化）から考察した。次に春日文雄会員が沖縄農村構造の分析を明治期の土地整理事業に関する資料を駆使して、当時の階層構造についての見解を発表された。資料が十分に存しないとしながらも、地割のなされる条件について言及された。三番目に、蘭信三会員が満州移民の体験をもつ戦後集団入植村を調査し、この開拓村が昭和四〇年代まで農民層の分解が抑制されてきたことの主要な要因を移民経験に基づく住民間の「きずな」に求めた。北原淳会員はタイ農村を、農家の農外就業の差異と労働市場の展開状況から「全面的資本主義化地域」、「部分的資本主義化地域」、「雑業層滞留の資本主義未浸透地域」、「資本主義未浸透地域」、の四つの類型に区分し、それぞれのタイプからの事例分析から、とくに家族の異質性を問題とされた。最後に、酒井恵真・白樺久・小内透会員は島根県下の平場農村の展開過程を、集落の転作対応による農業の活性化と生活諸集団の重層的な活動との関連に着目し、考察した。

第一日日の後半から、吉沢・東・北原会員による司会のもとに共通課題の報告が始められた。まず、西川善介会員の「近世の入会林野と村落」と題する報告は、戒能氏の行政村としてのむらと生活共同体としてのむらの区分を画期的なものとして指摘し、これら二つの側面は必ずしも重なり合つているということはできず、分離している村々もあることが強調され、共同体としてのむらの側面を近世の木曾、飛驒山村等の入会林野を題材にしての研究報告であった。共同体としてのむらの機能が現実の入会関係を規定するときの意味というものが問われなければならないとして、近世山村の文書を綿

密に考究された。

次に、岩本由輝会員から「本源的・土地所有とムラの土地利用秩序」について報告された。本源的・土地所有とムラの土地利用という中で、日本の神話にみられる天津罪としてのシキマキ、クシザン、アセナワという言葉の使用例を中世・近世・近代の文書の分析を通じて検討し、土地所有意識の推移を問題とされた。

大会一日目は、前日に続いて共通課題報告が、長谷川昭彦会員から「村落の変貌と土地利用秩序の展開」と題してなされた。そこで、村研の地区研究会での討論の整理のあと、現代農村と土地利用の把握に向けての独自な展開がなされた。まず、人間に対してもつ土地の意味の考察から生活資料の供給の場としての、生活行動の範囲としての二重の意味のあることを指摘した。一方、村落については「村落連関体」なる概念が提示され、現代農村が「村落複合体」段階にあるとみて、この段階での土地利用は高度成長期において自然の生態系の破壊、公害、農地のスプロール化等々の問題を惹起せしめたが、今日これらの解決のために集落レベルから市町村レベルまでの多様な農村計画が必要となつてきていると主張するものであった。

最後に、島根大学の永田恵十郎氏から「過疎山村の明暗」と題する特別報告があった。過疎化の激しい島根県下の山村を事例的にとりあげられ、高度成長期の「近代化」の中で過疎山村は、人口維持の困難性、水田十里山十山林の統合システムの崩壊といった社会的・病理的な事態に直面しているとの現状把握がなされた。このような危機的な中にも地域住民の中に自然的個性に着目して地域資源を積極的に利用する農業生産を指向し、再活性化を図っている。

とする動きが生まれてきており、この生産に関わる活動が地域の社会文化的な活動とも連動するようになってきていることが報告された。そして、今後の方向としては、村落の伝統的な資源利用体系（生産活動が意識的、生産手段を自らが作る、生産活動が社会的）を基礎として、今日的な生産力水準に依拠するかたちで再構成することの必要性が強調された。

この後、課題報告にひき続いて共同討議に移ったが、先ず司会者団からの要請によって、近世の西川報告と中世を中心とした岩本報告を近現代に繋げるかたちで安孫子麟会員と磯辺俊彦会員が論点の鮮明化とその展開について論述された。

安孫子会員からは入会関係の変化解体の過程で生活共同体としてのむらの機能をみようとするとき、商品経済の浸透だけでなく藩財政の変化や利用主体としてのイエの村落での位置づけ（村落の内部構造）の必要性が指摘され、また、神話に出てくる天津罪は一体何故に生まれてきたのかとの問い合わせからその根底にあるものはイエとしての經營保障であると考えられるが、この保障をしなくてもよい段階では耕地に対するこのような規制力は消失してしまうのではないかといった事柄がコメントされた。

磯辺会員からは所有の本源的・本質的形態を肯定的に評価し、労働と所有の同一性を現代的に再構築することが、今日求められているのであろうとの理解に基づいて、永田報告にあつた自然的・社会的個性に着目した新たな土地利用体系は、安孫子会員のいう耕地生態系の安定・地力維持等の議論の展開の中から、資本主義の中での「私有」の展開のうちに所有の下に従属されてしまった労働主体の回復の途を探すことはできないかとのコメントがあった。

これらを受けて討議が進められた。まず、西川会員から磯辺会員の新たな土地利用体系の再建に関連して、近世においては土地の所持意識はあるが、所有権としてよりも用益権としての性格が重視されていたことが補足され、私的・土地所有の社会的規制の必要性が述べられた。高橋、河村、池上の各会員から、現実を比較的肯定的に認めるなかで大・中・小土地利用といった農村計画の必要性を主張する長谷川報告に対して、農地利用の公共性についての意見がみられた。すなわち、現状の農村計画は都市的ネットワークの中で農村が補完的・従属性のみなされ、都市と農村の融合というとき都市サイドの公共性が全面に押出されてくるのであって、このような時にこそ典型的な農村像といったものを明確にしてゆかなければならぬとするものであった。

その後もいくつかの質問や意見がみられたが、自作農的・土地所有から社会的合理性の再建（磯辺）、私的所有の社会的規制の必要（西川）、自然的個性に着目した土地利用体系（永田）などへどのような統合化が可能であるかが主要な問題として今後に残された。また、高山会員からゲルマン共同体と較べて特殊な日本の共同体の展開過程の中に私的所有の質的な差異を求めなければならぬのではないかといった指摘がなされた。

今大会の共通課題はあまりに根本的な問題であるにもかかわらず、例えば土地利用といった用語の意味内容に各会員間に相当な違いがあるようと思われた。土地の利用とは耕地の利用といったかたちで集中的に議論されていたようだが、今日の農村を検討する場合それだけで対応出来るのであろうかといった印象をもつてしまつた。もちろん、村落と農業とは不可分の存在であり、農業生産の基盤とし

て土地＝耕地が重視されるのは当然ではあるけれども、農地のスピード化、耕作放棄地の増加等の耕地をめぐる危機的な様相を呈してきている一方で、農村の過疎化、高齢化の広範な進行がみられ、農村それ自身の崩壊の危機に直面しているのである。また農村の生活体系の転換がみられるなかで、農村的自然の整備・生態系の保持、景観の保全、福祉的な諸施設や交通・通信網の整備といった事柄が農村の活性化の一つの素材として考えられなければならない。農村の生活者側からの戦略と要求実現の一手法としての農村計画という形でみられるようになってきている時、耕地の利用だけではなくもつと広く共同の消費手段の配置や景観をも視野に入れて土地利用秩序を考えていかねばならないのではないかろうか。

最後になつたが、村研としてはめずらしく、立派な温泉ホテルを会場として設定して頂いた島根大学の関係者の方々に感謝したい。大会でのむずかしい議論で頭が混乱した私には、身体を温める豊かな湯、優雅な庭園、そして国引き太鼓の生演奏は心和ませるに十分な環境であり、島根県での大会は印象深いものであった。ただ、私のような若輩の者にとって、部屋割はあいうえお順のみが合理的ではないように思われた。